

「奇妙な猫たち」シリーズ第二弾

ご挨拶と作品解説

「奇妙な猫たち」

たなか 踏基

400字詰原稿用紙 300枚

平成十七年十二月八日

出版のご挨拶

この度、踏基HPに掲載しご愛顧の二作品「新雪国幻想」「奇妙な猫たち」が、前著『奇妙な喫茶店』に引き続き、(株)文芸社より『奇妙な猫たち』として全国配本上梓の運びとなりました。此処に、皆様に報告しご挨拶申し上げます。

今回併載の「新雪国幻想」は半世紀前の稚拙執筆のリメイク作品であります。松本舞台の前著「奇妙な喫茶店」は、本年二月に配本され、皆様のご支援を得て、NHK長野放送局の書籍ランキング番組第六位に入りました。現代短歌界の重鎮小池光氏より、縁あつて巻頭の序文戴きました。ご存知の如く小池氏は、短歌界初の斉藤茂吉賞と釈超空賞のダブル受賞をされた方です。誠に身に余る光栄と感謝申し上げます。この度も、著名ジャーナリストで文藝評論家・梅本浩志氏の解題「奇妙な猫たち」と題する、拙著二作の厳しい作品評論を賜り、巻末に掲載することができました。本著「奇妙な猫たち」も、前著にも増す皆様からのご薫陶賜り、ぜひお手に取って、座位の一興に供して

戴きますようお願い申し上げます。

此処では、(株)文芸社の所見と共に、梅本氏の特別寄稿の一部を紹介致します。今後はどうぞ、(株)文芸社より発売の書籍を、最寄の書店にて是非お買い求め下さいますようお願い申し上げます。

尚、全国配本は平成十八年一月十五日です。

一部首都圏書店で、年内二十日頃から、拙著の店頭陳列もしくわ書籍注文が可能になります。

文芸社の所見

x x

前著に続き安曇野を舞台とし、真摯な芸術家の姿を浮び上がらせる『奇妙な猫たち』、昭和三十八年豪雪を背景とした『新雪国幻想』。テキストは異なるが、両作品に共通していることは、著者が文献・資料を広く渉猟し、充分に咀嚼した上で、展開に生かしているという点である。どちらも著者の視野の広さと、「書きたい」意欲が全編から感じ取れる意欲作である。『奇妙な猫たち』に先ず注目したい。猫の幽体離脱等の珍しいファクターを盛込みながら、語り手の佐古光夫の眼を通し、一人の才能ある彫刻家の姿が描かれる。石の中に「美」を見出

し、自らの鎚と鑿で生命を削りだそうとする岩淵榮太郎。芸術に心身を捧げたその姿と、心を通わせる猫たちの有り様を、著者はあたかも衣服の絵をよくに活き活きと描き出す。

芸術という、底知れぬ奥深い世界に身を置く榮太郎の制作のプロセスを綴るくだりは、まさに鬼気迫るものがある。ジャンルは異なるが、言葉ないし文章を通じて真摯な自己表現を試みる著者ゆえに、自らの求める芸術表現へとひた走る榮太郎の姿勢に深い理解を示す言葉に、強い説得力があった。彫刻家はまた、猫を愛する心の持ち主としてイメージされている。緑成す山々に囲まれ、しつとりとした濃い空気を漂わせる信州安曇野の風土や登場人物の友人の著実業の百瀬真太郎が、極めて丁寧に愛情を持って描写されている。

決して分量的に多いとは言えない枚数に、多くのモチーフが詰め込まれたという印象は否めない。テーマを慎重に絞込み、前面に何を打出すか、そのために何を盛込むべきなのかを見極め、背景説明をより簡潔にまとめみてはどうだろうか。それにより、安曇野の香を伝える中に、人の営みと、人智の及ばない不可思議な繋がりを浮き彫りにする一作としての香気がより一層強まることだろう。

『新雪国幻想』は、豪雪地帯を舞台にして、人々の間に伝承の「雪女郎」や「雪蛇」が幻想として生み出されていくプロセスを検証してみせたと言える。雪深い冬を暮らす人々とつとて、雪は「美しい」と同時に生命を危険にさらす「恐ろしい」存在に他ならない。

「雪女郎」「雪蛇」はこの二つの意識を具現化したものであり、惨禍もしくわ不思議な力を持つ存在なのである。著者は「三八豪雪」を踏まえつつ、暴威とまで言える大雪の中、主人公・荻上實が一人脳裏に描く雪女郎との遊び(幻想)を鮮烈に描き出している。その幻想は、妖しく匂いたつほどにエロティックでさえある。

雪女郎とのからみが印象的であるゆえ、下宿の女主人から紹介された、村上千恵子との繋がりがあつさりし過ぎていて、幻想と生身の女性を絡めながら、主人公の恋情に一步踏み込んで欲しいところである。主人公の郷里の家族に対する複雑な思いは、物語の陰翳を濃くする効果があるので、初手から提示する方がよい。慾を言えば、報道文に近いジャーナリスティックな文体が小説の空気を削いでいるような気がする。実際の出来事をフィクションの中に溶け込ませる工夫を望みたい。

両作品とも丹念に仕上げられた作品であり、著者の意気込みの感じられる意欲作である。人智を超越した「何か」を、オカルト的な興味からではなく、不世出の芸術家の「念」或いは雪がもたらす「幻想」として描いた点で評価したい。(文芸社編集部)

特別寄稿 作品評論

解題「奇妙な猫たち」 梅本浩志

時間と空間の異なり たなか踏基の作

品を読み、理解するには、なによりもこのことを頭の中に入れておかなければなるま

い。たなかの過去してきた時間と、彼が学び、活動し、働いてきた場所(空間)が、われわれと同じものだと決めてかかつて読もうとすると、どうしてもたなか固有の作品の世界に入りきれないなにかを、読者は感じるようになってしまつからだ。

たなかは一九四一年に山形市で生まれ、長野市、岡谷市で少年時代を過ごした後、松本市に居を転じた。この松本住まいがたなかの文学生活に決定的な影響を与えていることは、『奇妙な喫茶店』や『奇妙な猫たち』から十分推察される。特に一九五八年に松本深志高校で同人誌「えぞうぶ」に参加してから一九六七年に筆を断つまでの九年間は現在のたながが形成される重要な時期であった。

たなかは、一九六五年に就職してからしばらくは創作活動を続けたものの、一九六七年に化学技術畑の仕事に打ち込むことを決意して創作活動から離れることを決断し、二〇〇一年に就職先を定年退職するまで、一切の創作活動から身を引いていた。実に三四年間も筆を断っていたのである。わずかに定年一年前に俳句に心が動き、同人誌「岳」に入会しているだけである。

この俳句への志がたなかに小説作品への創作意欲をかき立てる火をつけたのか、定年退職を契機に創作活動を再開し、まずホームページで作品を発表し始めた。六〇歳だった。そして二〇〇五年二月にその一部を『奇妙な喫茶店』と題して文芸社から刊行した。そして

息づくひまもなく今回の挑戦である。

絶筆の期間は実に三四年もあった。通常の作家の場合、この長期の空隙の時間は、致命的である。だがたなかの場合、そうではなかった。このことは別に奇跡的ではない。というのも、たなかの場合、時間はたなかに流れ、松本時間で過ぎたからである。おそらく絶対時間の三四年の時間は、たなかにとってはせいぜい三年か四年でしかなかったのではないだろうか。つまりたなかは六〇歳だというのが、まだ三〇歳なのである。作家でいえば、円熟期に入ろうとする年齢なのである。

たなかにとってのその三年か四年は、決してむだなものではなかった。というより、今日刊行されている彼の作品を読むかぎり、この「化学技術」での経験、考え方、知識が創作活動再開後の作品のそれぞれに色濃く反映されていて、特色づけているのである。

特に相対性理論に基づく時間軸や空間軸の自由な転換によるシークエンスの設定はたなか作品ならではの特色をにじみ出す。前回作品の『奇妙な喫茶店』でこの特色が秀れて発揮されている。現在、過去、未来を变幻自在に入れ替わらせて主題を展開していく。知つたかぶりの作者なら、ハリウッド映画もどきのSF作品に仕立て上げて、商品としての小説作品として売り出すところだが、たなかは科学者としての理解と知識を所有しているからこそ、そのような愚行は行わない。

主人公・宇崎雅夫の行きつけの喫茶店に

架けられていたモジリアー二の裸婦の絵を見ていたとき、「陰部の辺りに開いた出口の辺り」から物語が展開する。その穴の奥は白のイメージで現実を超えた世界が開けていく。時間は主人公の祖母たちの過去から、主人公の置かれている現在を行き来する。空間も信州とドイツを往復する。こうして読むものを主人公・宇崎雅夫の母や祖母の子宮へと誘っていく。時間と空間とを自在に織りなして子宮探検の旅へと駆り立てていくのである。

私は野間宏の『暗い絵』を読むとき、どうしてか、ふと腔腸動物のイメージを想うのであるが、たなかのこうした作品を読むとき同様な思いに駆り立てられる。ただ腔腸動物が口と腸とが直結しているのに対して、野間やたなかの作品における腔腸動物は口と生殖器が直結しているのである。ヨーロッパ各地でブリューゲルの絵を多数見たが、ブリューゲルも特に腔腸動物を描いてはいないのだが、つい私は腔腸動物を想起したのである。そんな体験をした私は、どうしてか野間やたなかの作品でも同じ思いをするのである。

『奇妙な喫茶店』が母たちの子宮への旅の物語であったなら、『横濱 JAZZ AGE』は父の精巣への旅だった。精子となった主人公が父の生殖器の穴から父の精巣へと旅立ち、父を内側から、根源から探し求めていく。クラリネットやアルトサクソスあるいはトランペットの音はそうした旅で出会う哀しみ、怒り、絶望や孤独の叫びではなかったか。「結核療養中の年長の女性を、母に内緒で見舞っ

ていた父」をその時、しつかりと主人公が理解し、「父が何故クラリネットを吹くようになったのか？」というかねてからの疑問をこうして解けるようになったのである。

今回収録された作品『新雪国幻想』と『奇妙な猫たち』は、いずれも『奇妙な喫茶店』の延長線上に位置する作品群だと言つてよいかと思う。ただし、当然のことながらテーマにズレがある。『新雪国幻想』が雪蛇伝説を潜在的性欲対象の女性・村上千恵子と重ね合わせることによつてシユールな白の世界を詩的に表現したのに対して、『奇妙な猫たち』はユングの共時性の理論を活用して、石像彫刻家の存在と石仏を媒介軸に人間と猫たちの心霊的な交流を、時間と空間とを自在化するることによつて描いている。

『新雪国幻想』は、雪蛇幻想を連想化する遊びを膨らませていき、そうした遊びを拡げていく過程で「どんどんと積上げた精神の遊びの中を彷徨している内に、それが次第に陶醉に似た恍惚感を伴う性の妄想に変わっていく」物語である。雪女郎は雪蛇へと変幻し、「女なら、雪蛇は膣から侵入して子宮を食い千切り、男なら尿道から侵入して睾丸を一呑みにして破壊する」と前回作品群を受けとめて、話を進行させる。雪蛇が這いずるのは雪原であり、そこには火口が穴を空けて人を待ち受ける。その火口は「やりきれないその膣口」である。火口に落ち込むのは「女の生殖器の中の精子」となった自分である。雪の世

界はこうして女そのもの、つまりエロスとしての女体であることを知らされる。

雪蛇と雪女郎はやがて実在の女性・村上千恵子と交錯し、混在していく。放送局で働く千恵子に対して、主人公・荻上實は特別な恋愛感情は持たないものの、ちよつと梶井基次郎にとつてのレモンのように、そこに実在する女だからとの単純な現実から付き合いを深めていく。主人公は彼女の「この肌の白さ」と「滑らつこい手首の丸みから指先の白さ」とともに、「上気した頬に浮かべる透いて出るような赤み」と「透明な顔の上で一寸引かれた唇の朱の色」に強く引かれる自分を発見する。

『奇妙な喫茶店』では白と緑のイメージだったが、『新雪国幻想』では白と赤(朱)のイメージに変わっている。緑が信州の山野のサンボル(象徴)なら赤はエロスの世界を遊弋する人間のサンボルである。

やがて二人は待ち合わせて夜行列車に乗る。向かい合い、膝が触れ合う無距離で坐つたが、その時の「千恵子の黒い髪の毛の中央に、白いスツキリとした一本の線」を男は見る。「スチームの熱で千恵子の顔は上気していた。千恵子の濃い一重瞼の睫毛が震え、頬に淡い赤みが透いて出た。かち合った眼の中に、脈打つような興奮の流れを感じた」。

そんな鼓動が伝わってくるエロスの状況も、表面的にはなにこともなかったように、全ては終わる。列車が谷川連峰の直下を貫いている新清水トンネルの駅に止まったとき千恵子は別れを告げて、下車し、四八六段もの

解題「奇妙な猫たち」

階段を下がって姿を消していった。ちよつどその時、「越後の雪の精霊は、雪女郎となつて、上越国境の山野を何時までも彷徨い歩いた」。千恵子は幻想の雪女郎だったのか、現実と超現実の世界がこうして重なり合うのである。トンネルもまた穴である。電光を照らさなければ、その穴は眞つ暗である。

『奇妙な猫たち』は信州・安曇野を時空の世界とする人間、猫、石像仏のテレパシー（心霊交流）を描こうとした作品である。前回作品群の『奇妙な喫茶店』では時間軸と空間軸が自在に転換しあつて物語が構成されているのに対して、この作品は主として空間軸を様々に転換し、時間軸をほんの少し微妙にずらすことによつて、現実を超えた世界を描き出そうとしている。

信州人の民族意識は他府県人には理解しがたいものであるが、その中でも「安曇族」のそれは格別なものがあるようである。そんな「安曇族」意識を共有する主人公で語り手・佐古光夫の眼を通して、二人太郎と称し称される石像彫刻家・岩淵榮太郎と作家・百瀬真太郎との超現実的な友情世界が拡がりつつ物語が展開していく。

オコジョと二人が出会うサンボリスチーク（象徴主義的）なシーンを頂として、まず二人の間に語らずとも伝わるコミュニケーションが成立し、その心霊交流は周辺に浸透して猫たちとの間にもテレパシーが可能

となり、それらが主人公で語り手・佐古光夫の心に深く沈着したいま一つのサンボルである十一面観音石像へと収斂されていく。猫たちは主人の彫刻家が病院で死んだときにも、アトリエにいながら主人の死を知り、「幻覚の亡霊を感知した。所構わずアトリエ中を走り廻つた。まるで地の底の亡霊を呪い懸命に追払うような、発狂にも似た仕草だつた」。

「物質以外の不思議なものが、猫と人間の間で伝わることがある。それは、例えば距離を置いても伝わり、人や猫の五感のような感覚媒体が無くて、神秘的ですらある猫本来の霊的感応力で伝わるのだと……」と信じるたなか踏基は、今後このテーマを追い続けるように思える。科学者としてはどうしても追求できなかったことを、文学の世界で追求してみる気になつたであろうと私は感じている。

だからたなかは、今後も精力的に創作活動に打ち込んでいくにちがいない。絶対時間の三四年間、実際の時間はせいぜい三年間か四年間という短い時間のトンネルを抜け出たたなかは、いまやまっしぐらに自分固有の文学世界を構築せんとしている。だからその意味では、今回の作品群を含めて、これまでの作品はエチユードであるとともに、原型でもあ

る。その意味で今後のたなか作品を理解していく上で、これまでの作品は読んでおかなければならないものと言えよう。そしてそうであるからには、今後のたなか

かの作品は大いなる変貌を遂げていくことが必定である。いまたなかは円熟期の入口にさしかかつている。そのたなかに待ち受けているのは、激しい自己破壊作業への否応なき直面であろう。

これまでの作品群に見られるユークリッド幾何学的な起承転結とオムニバス風のシューエンス展開を図る作品構成、客体と主体とを自在に入れ替えていく話法の転換、白、緑、赤といったイメージ描写に適切な語彙の選択、徹底した唯物論に立ちながら展開するシュールレアルな状況描写に応じる語法の創出、そうした新しいスタイル（文学作法）をたなか自身が見出し、今後の作品創作に用いていかなない限り、たなか踏基独自の作品は生まれ出ないだろう。

それがたなかにとって自己破壊作業の具体的内実なのであり、だからこそ円熟期に向かういま、たなかに作家としての死の苦しみが始まるのである。それをなし得る日々が楽しみであり、待ち遠しい。今回の作品群は、前回の作品群とともに、そうした新しく生まれ出る「三〇歳の作家」たなか踏基の貴重なアルバムでもある。（二〇〇五年九月十三日記）

尚、梅本浩志氏のジャーナリストとしての略歴や著作・訳書については、拙著巻末に掲載しておりますのでぜひとも参考にしてください。